「つくば」という森

根本誠二
歴史・人類学系教授

森にしたしむ

「つくば」に住むようになって7年がたった。毎朝，鳥のさえずりで目覚め，ねむい眼に飛び込んでくる木々の緑は，何にもまして心地よい。時には，啄木鳥の軽快でリズミカルな音も聞こえてくる。そして，わたしは，何よりも「つくば」の桜から新緑の季節が好きである。ともすると「花盗人」のごとく，花の盛りを求めて，筑波山の周囲を自動車でめぐることがある。このころは，新学期が始まるという新鮮さと，「いまだに講義ノートができていない」ことへの焦りが，相半ばしている時期でもある。いずれにせよ，「つくば」では，豊かな木々の緑と数々の鳥のさえずりに事かかない。しばし都会の喧噪から離れ，身も心も研究学園都市の恩恵にあずかっている。

書を捨て街に出よ

1960年代の後半に「書を捨て街に出よ」というような声を聞いたことがある。これにさそわれたわけでないが，わたしはことあるごとに，いろいろな街をめぐり歩いた。ともすると「変な若い人」といった地元の人々の眼線を感じたことがある。それも，いつの間にか「変なおじさん」となってしまった。そうした眼線にもめげず，今でも年に数回，いくつかの街をめぐり歩いている。心の中には，歴史を研究する者として，人間（自分も含めて）とは何かを知るためにという「錦の御旗」を振りかざしつつ。それでもふと気がつくと，手には古びた本を何冊か抱えてしまっている。

「つくば」という森

「つくば」は，例えるならば，人々にある種の心地よさをもたらしてくれる大きな「森」である。7月のある暑い日中に，もういないと思っていたカブトムシの番（つがい）を，自宅のすぐそばの櫟（くぬぎ）の木蔭で見ることができた。それは，こどものころに見て以来の光景であった。だが，わたしにとっては，大きな森も無機的であると感ずることもある。これは，東京にいたときにはなかった森への感慨である。こうした感慨にひたり，「つくば」での生活に思いをめぐらしていると，突然，木々の緑のかなたから，森の主となってしまった鳥や色鮮やかな「おなが」のけたたましい鳴き声が聞こえてきた。

（ねもとせいじ　日本史学）